

—平成26年度—

中学入学試験問題

—国語—

《解答時間：60分》

《配点：150点満点》

—注意—

1. 問題は試験開始の合図^{あいず}があるまで開かないこと。
2. 問題用紙のページ数は、表紙を除いて18ページ、解答用紙は1枚である。不足している場合は、ただちに申し出ること。
3. 解答はすべて、問題の番号と解答用紙の番号^{いっち}が一致するよう、解答用紙の解答らん^{らん}に記入すること。所定のらん以外の解答や、不明りょうな書き方をした解答は採点しない。（※印のらんには記入しないこと）
4. 開始の合図があったら、まず解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。

1 次の文章を読んで、あとの(1)～(10)の問いに答えなさい。

この世界は「虚仮の一念」と言つて、そのことばかりやっていればなんとかはなるものです。俳優でもそう。下手くそな人が、お前はダメだと言われても一生懸命(1)やっていると、中年を過ぎてから花が咲くこともある。若いうちに最初からどーんと出てくる人もいるし、虚仮の一念で出てくる人もいるし。分らないものです。

でも、器用で最初からできる人は後からダメになる人が多いですね。自分に才能がなくても、虚仮の一念でやっていけばいつかは花が咲く。

その途中はもちろん辛いですが、どうして耐えられるかという結局は好きなんだね。それ以外にもうできない。これもだめ、あれもダメとあちこちやっている人は結局何もつかまないうで終わってしまうけれど、一筋の道をずっとやっているとなんとかなる。はじめからできる人はそんなにいません。しょっちゅうくじけるんだけど、他にやることがないのでまたやる。一筋道ですね。他に何かをやるって言っても他にやることがない。

絵本にしても他のソウサクにしても、そうして多くやっているとひとつのメソッドができてきます。絵本教室などで、絵本はこういうグアイに書きなさいと教えたりしますね。あれではダメなんです。あれは基本の部分を知るだけであって、自分のやり方をできないとダメ。絵を描くのもそうですよ、自分のメソッドが、ある時にできるわけ。

⑥例えば油絵画家の藤田嗣治は、ある時フランスに行つて絵を描き始めました。でもフランス人の油絵の方がうまくてどうしてもかなわない。一生懸命考えて、画面を真っ白にぬつてから日本の面相筆(眉毛・鼻の輪郭など顔の細部などを描くために使う穂先の細い筆)で油絵を描く方法をアミ出したわけです。ネコの毛も一本ずつ描くというふうにやっていたら、これはフランス人にはできないというので藤田嗣治の画風ができた。東郷青児もそうで、画面を一度ピカピカにしちゃう。そうやって東郷メソッドというような画風ができていくわけだね。絵本も同じように自分の作り方というのができていくので、⑨⑩もあれやこれややっているうちにやつとやなせメソッドができてきました。

それを見つめるのはどうすればいいかというと、それはたくさんやるより仕方がない、いくつもいくつもやっているうちにできてくるんですね。本人独自在いろいろ

開発していくわけ。真似ばかりしていても結局ダメなんですけど、最初は真似をしていいんです。版画を彫るにも、小説を書くにも、最初は好きなやり方を真似すればいい。でもある時期に自分のメソッドに入らなくちゃいけない。

メソッドを作る簡単な方法はなくて、やってやってやりまくっているうちにいつの間にかできてくるんですね。やなせメソッドは、誰かが真似をしてもできない自分のものなんだね。他の人もそうですね。

自分が努力したり、友達に恵まれたり先生に恵まれたり、いろんなことで続いている。友達になんとか啓発される場合もあるし、それはそれぞれですが、とにかく続けていなくちゃそういうことは分らないんです。

⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿㏀㏁㏂㏃㏄㏅㏆㏇㏈㏉㏊㏋㏌㏍㏎㏏㏐㏑㏒㏓㏔㏕㏖㏗㏘㏙㏚㏛㏜㏝㏞㏟㏠㏡㏢㏣㏤㏥㏦㏧㏨㏩㏪㏫㏬㏭㏮㏯㏰㏱㏲㏳㏴㏵㏶㏷㏸㏹㏺㏻㏼㏽㏾㏿㐀㐁㐂㐃㐄㐅㐆㐇㐈㐉㐊㐋㐌㐍㐎㐏㐐㐑㐒㐓㐔㐕㐖㐗㐘㐙㐚㐛㐜㐝㐞㐟㐠㐡㐢㐣㐤㐥㐦㐧㐨㐩㐪㐫㐬㐭㐮㐯㐰㐱㐲㐳㐴㐵㐶㐷㐸㐹㐺㐻㐼㐽㐾㐿㑀㑁㑂㑃㑄㑅㑆㑇㑈㑉㑊㑋㑌㑍㑎㑏㑐㑑㑒㑓㑔㑕㑖㑗㑘㑙㑚㑛㑜㑝㑞㑟㑠㑡㑢㑣㑤㑥㑦㑧㑨㑩㑪㑫㑬㑭㑮㑯㑰㑱㑲㑳㑴㑵㑶㑷㑸㑹㑺㑻㑼㑽㑾㑿㒀㒁㒂㒃㒄㒅㒆㒇㒈㒉㒊㒋㒌㒍㒎㒏㒐㒑㒒㒓㒔㒕㒖㒗㒘㒙㒚㒛㒜㒝㒞㒟㒠㒡㒢㒣㒤㒥㒦㒧㒨㒩㒪㒫㒬㒭㒮㒯㒰㒱㒲㒳㒴㒵㒶㒷㒸㒹㒺㒻㒼㒽㒾㒿㓀㓁㓂㓃㓄㓅㓆㓇㓈㓉㓊㓋㓌㓍㓎㓏㓐㓑㓒㓓㓔㓕㓖㓗㓘㓙㓚㓛㓜㓝㓞㓟㓠㓡㓢㓣㓤㓥㓦㓧㓨㓩㓪㓫㓬㓭㓮㓯㓰㓱㓲㓳㓴㓵㓶㓷㓸㓹㓺㓻㓼㓽㓾㓿㔀㔁㔂㔃㔄㔅㔆㔇㔈㔉㔊㔋㔌㔍㔎㔏㔐㔑㔒㔓㔔㔕㔖㔗㔘㔙㔚㔛㔜㔝㔞㔟㔠㔡㔢㔣㔤㔥㔦㔧㔨㔩㔪㔫㔬㔭㔮㔯㔰㔱㔲㔳㔴㔵㔶㔷㔸㔹㔺㔻㔼㔽㔾㔿㕀㕁㕂㕃㕄㕅㕆㕇㕈㕉㕊㕋㕌㕍㕎㕏㕐㕑㕒㕓㕔㕕㕖㕗㕘㕙㕚㕛㕜㕝㕞㕟㕠㕡㕢㕣㕤㕥㕦㕧㕨㕩㕪㕫㕬㕭㕮㕯㕰㕱㕲㕳㕴㕵㕶㕷㕸㕹㕺㕻㕼㕽㕾㕿㖀㖁㖂㖃㖄㖅㖆㖇㖈㖉㖊㖋㖌㖍㖎㖏㖐㖑㖒㖓㖔㖕㖖㖗㖘㖙㖚㖛㖜㖝㖞㖟㖠㖡㖢㖣㖤㖥㖦㖧㖨㖩㖪㖫㖬㖭㖮㖯㖰㖱㖲㖳㖴㖵㖶㖷㖸㖹㖺㖻㖼㖽㖾㖿㗀㗁㗂㗃㗄㗅㗆㗇㗈㗉㗊㗋㗌㗍㗎㗏㗐㗑㗒㗓㗔㗕㗖㗗㗘㗙㗚㗛㗜㗝㗞㗟㗠㗡㗢㗣㗤㗥㗦㗧㗨㗩㗪㗫㗬㗭㗮㗯㗰㗱㗲㗳㗴㗵㗶㗷㗸㗹㗺㗻㗼㗽㗾㗿㘀㘁㘂㘃㘄㘅㘆㘇㘈㘉㘊㘋㘌㘍㘎㘏㘐㘑㘒㘓㘔㘕㘖㘗㘘㘙㘚㘛㘜㘝㘞㘟㘠㘡㘢㘣㘤㘥㘦㘧㘨㘩㘪㘫㘬㘭㘮㘯㘰㘱㘲㘳㘴㘵㘶㘷㘸㘹㘺㘻㘼㘽㘾㘿㙀㙁㙂㙃㙄㙅㙆㙇㙈㙉㙊㙋㙌㙍㙎㙏㙐㙑㙒㙓㙔㙕㙖㙗㙘㙙㙚㙛㙜㙝㙞㙟㙠㙡㙢㙣㙤㙥㙦㙧㙨㙩㙪㙫㙬㙭㙮㙯㙰㙱㙲㙳㙴㙵㙶㙷㙸㙹㙺㙻㙼㙽㙾㙿㚀㚁㚂㚃㚄㚅㚆㚇㚈㚉㚊㚋㚌㚍㚎㚏㚐㚑㚒㚓㚔㚕㚖㚗㚘㚙㚚㚛㚜㚝㚞㚟㚠㚡㚢㚣㚤㚥㚦㚧㚨㚩㚪㚫㚬㚭㚮㚯㚰㚱㚲㚳㚴㚵㚶㚷㚸㚹㚺㚻㚼㚽㚾㚿㜀㜁㜂㜃㜄㜅㜆㜇㜈㜉㜊㜋㜌㜍㜎㜏㜐㜑㜒㜓㜔㜕㜖㜗㜘㜙㜚㜛㜜㜝㜞㜟㜠㜡㜢㜣㜤㜥㜦㜧㜨㜩㜪㜫㜬㜭㜮㜯㜰㜱㜲㜳㜴㜵㜶㜷㜸㜹㜺㜻㜼㜽㜾㜿㝀㝁㝂㝃㝄㝅㝆㝇㝈㝉㝊㝋㝌㝍㝎㝏㝐㝑㝒㝓㝔㝕㝖㝗㝘㝙㝚㝛㝜㝝㝞㝟㝠㝡㝢㝣㝤㝥㝦㝧㝨㝩㝪㝫㝬㝭㝮㝯㝰㝱㝲㝳㝴㝵㝶㝷㝸㝹㝺㝻㝼㝽㝾㝿㞀㞁㞂㞃㞄㞅㞆㞇㞈㞉㞊㞋㞌㞍㞎㞏㞐㞑㞒㞓㞔㞕㞖㞗㞘㞙㞚㞛㞜㞝㞞㞟㞠㞡㞢㞣㞤㞥㞦㞧㞨㞩㞪㞫㞬㞭㞮㞯㞰㞱㞲㞳㞴㞵㞶㞷㞸㞹㞺㞻㞼㞽㞾㞿㟀㟁㟂㟃㟄㟅㟆㟇㟈㟉㟊㟋㟌㟍㟎㟏㟐㟑㟒㟓㟔㟕㟖㟗㟘㟙㟚㟛㟜㟝㟞㟟㟠㟡㟢㟣㟤㟥㟦㟧㟨㟩㟪㟫㟬㟭㟮㟯㟰㟱㟲㟳㟴㟵㟶㟷㟸㟹㟺㟻㟼㟽㟾㟿㠀㠁㠂㠃㠄㠅㠆㠇㠈㠉㠊㠋㠌㠍㠎㠏㠐㠑㠒㠓㠔㠕㠖㠗㠘㠙㠚㠛㠜㠝㠞㠟㠠㠡㠢㠣㠤㠥㠦㠧㠨㠩㠪㠫㠬㠭㠮㠯㠰㠱㠲㠳㠴㠵㠶㠷㠸㠹㠺㠻㠼㠽㠾㠿㡀㡁㡂㡃㡄㡅㡆㡇㡈㡉㡊㡋㡌㡍㡎㡏㡐㡑㡒㡓㡔㡕㡖㡗㡘㡙㡚㡛㡜㡝㡞㡟㡠㡡㡢㡣㡤㡥㡦㡧㡨㡩㡪㡫㡬㡭㡮㡯㡰㡱㡲㡳㡴㡵㡶㡷㡸㡹㡺㡻㡼㡽㡾㡿㢀㢁㢂㢃㢄㢅㢆㢇㢈㢉㢊㢋㢌㢍㢎㢏㢐㢑㢒㢓㢔㢕㢖㢗㢘㢙㢚㢛㢜㢝㢞㢟㢠㢡㢢㢣㢤㢥㢦㢧㢨㢩㢪㢫㢬㢭㢮㢯㢰㢱㢲㢳㢴㢵㢶㢷㢸㢹㢺㢻㢼㢽㢾㢿㣀㣁㣂㣃㣄㣅㣆㣇㣈㣉㣊㣋㣌㣍㣎㣏㣐㣑㣒㣓㣔㣕㣖㣗㣘㣙㣚㣛㣜㣝㣞㣟㣠㣡㣢㣣㣤㣥㣦㣧㣨㣩㣪㣫㣬㣭㣮㣯㣰㣱㣲㣳㣴㣵㣶㣷㣸㣹㣺㣻㣼㣽㣾㣿㤀㤁㤂㤃㤄㤅㤆㤇㤈㤉㤊㤋㤌㤍㤎㤏㤐㤑㤒㤓㤔㤕㤖㤗㤘㤙㤚㤛㤜㤝㤞㤟㤠㤡㤢㤣㤤㤥㤦㤧㤨㤩㤪㤫㤬㤭㤮㤯㤰㤱㤲㤳㤴㤵㤶㤷㤸㤹㤺㤻㤼㤽㤾㤿㥀㥁㥂㥃㥄㥅㥆㥇㥈㥉㥊㥋㥌㥍㥎㥏㥐㥑㥒㥓㥔㥕㥖㥗㥘㥙㥚㥛㥜㥝㥞㥟㥠㥡㥢㥣㥤㥥㥦㥧㥨㥩㥪㥫㥬㥭㥮㥯㥰㥱㥲㥳㥴㥵㥶㥷㥸㥹㥺㥻㥼㥽㥾㥿㦀㦁㦂㦃㦄㦅㦆㦇㦈㦉㦊㦋㦌㦍㦎㦏㦐㦑㦒㦓㦔㦕㦖㦗㦘㦙㦚㦛㦜㦝㦞㦟㦠㦡㦢㦣㦤㦥㦦㦧㦨㦩㦪㦫㦬㦭㦮㦯㦰㦱㦲㦳㦴㦵㦶㦷㦸㦹㦺㦻㦼㦽㦾㦿㧀㧁㧂㧃㧄㧅㧆㧇㧈㧉㧊㧋㧌㧍㧎㧏㧐㧑㧒㧓㧔㧕㧖㧗㧘㧙㧚㧛㧜㧝㧞㧟㧠㧡㧢㧣㧤㧥㧦㧧㧨㧩㧪㧫㧬㧭㧮㧯㧰㧱㧲㧳㧴㧵㧶㧷㧸㧹㧺㧻㧼㧽㧾㧿㨀㨁㨂㨃㨄㨅㨆㨇㨈㨉㨊㨋㨌㨍㨎㨏㨐㨑㨒㨓㨔㨕㨖㨗㨘㨙㨚㨛㨜㨝㨞㨟㨠㨡㨢㨣㨤㨥㨦㨧㨨㨩㨪㨫㨬㨭㨮㨯㨰㨱㨲㨳㨴㨵㨶㨷㨸㨹㨺㨻㨼㨽㨾㨿㩀㩁㩂㩃㩄㩅㩆㩇㩈㩉㩊㩋㩌㩍㩎㩏㩐㩑㩒㩓㩔㩕㩖㩗㩘㩙㩚㩛㩜㩝㩞㩟㩠㩡㩢㩣㩤㩥㩦㩧㩨㩩㩪㩫㩬㩭㩮㩯㩰㩱㩲㩳㩴㩵㩶㩷㩸㩹㩺㩻㩼㩽㩾㩿㪀㪁㪂㪃㪄㪅㪆㪇㪈㪉㪊㪋㪌㪍㪎㪏㪐㪑㪒㪓㪔㪕㪖㪗㪘㪙㪚㪛㪜㪝㪞㪟㪠㪡㪢㪣㪤㪥㪦㪧㪨㪩㪪㪫㪬㪭㪮㪯㪰㪱㪲㪳㪴㪵㪶㪷㪸㪹㪺㪻㪼㪽㪾㪿㫀㫁㫂㫃㫄㫅㫆㫇㫈㫉㫊㫋㫌㫍㫎㫏㫐㫑㫒㫓㫔㫕㫖㫗㫘㫙㫚㫛㫜㫝㫞㫟㫠㫡㫢㫣㫤㫥㫦㫧㫨㫩㫪㫫㫬㫭㫮㫯㫰㫱㫲㫳㫴㫵㫶㫷㫸㫹㫺㫻㫼㫽㫾㫿㬀㬁㬂㬃㬄㬅㬆㬇㬈㬉㬊㬋㬌㬍㬎㬏㬐㬑㬒㬓㬔㬕㬖㬗㬘㬙㬚㬛㬜㬝㬞㬟㬠㬡㬢㬣㬤㬥㬦㬧㬨㬩㬪㬫㬬㬭㬮㬯㬰㬱㬲㬳㬴㬵㬶㬷㬸㬹㬺㬻㬼㬽㬾㬿㭀㭁㭂㭃㭄㭅㭆㭇㭈㭉㭊㭋㭌㭍㭎㭏㭐㭑㭒㭓㭔㭕㭖㭗㭘㭙㭚㭛㭜㭝㭞㭟㭠㭡㭢㭣㭤㭥㭦㭧㭨㭩㭪㭫㭬㭭㭮㭯㭰㭱㭲㭳㭴㭵㭶㭷㭸㭹㭺㭻㭼㭽㭾㭿㮀㮁㮂㮃㮄㮅㮆㮇㮈㮉㮊㮋㮌㮍㮎㮏㮐㮑㮒㮓㮔㮕㮖㮗㮘㮙㮚㮛㮜㮝㮞㮟㮠㮡㮢㮣㮤㮥㮦㮧㮨㮩㮪㮫㮬㮭㮮㮯㮰㮱㮲㮳㮴㮵㮶㮷㮸㮹㮺㮻㮼㮽㮾㮿㯀㯁㯂㯃㯄㯅㯆㯇㯈㯉㯊㯋㯌㯍㯎㯏㯐㯑㯒㯓㯔㯕㯖㯗㯘㯙㯚㯛㯜㯝㯞㯟㯠㯡㯢㯣㯤㯥㯦㯧㯨㯩㯪㯫㯬㯭㯮㯯㯰㯱㯲㯳㯴㯵㯶㯷㯸㯹㯺㯻㯼㯽㯾㯿㰀㰁㰂㰃㰄㰅㰆㰇㰈㰉㰊㰋㰌㰍㰎㰏㰐㰑㰒㰓㰔㰕㰖㰗㰘㰙㰚㰛㰜㰝㰞㰟㰠㰡㰢㰣㰤㰥㰦㰧㰨㰩㰪㰫㰬㰭㰮㰯㰰㰱㰲㰳㰴㰵㰶㰷㰸㰹㰺㰻㰼㰽㰾㰿㱀㱁㱂㱃㱄㱅㱆㱇㱈㱉㱊㱋㱌㱍㱎㱏㱐㱑㱒㱓㱔㱕㱖㱗㱘㱙㱚㱛㱜㱝㱞㱟㱠㱡㱢㱣㱤㱥㱦㱧㱨㱩㱪㱫㱬㱭㱮㱯㱰㱱㱲㱳㱴㱵㱶㱷㱸㱹㱺㱻㱼㱽㱾㱿㲀㲁㲂㲃㲄㲅㲆㲇㲈㲉㲊㲋㲌㲍㲎㲏㲐㲑㲒㲓㲔㲕㲖㲗㲘㲙㲚㲛㲜㲝㲞㲟㲠㲡㲢㲣㲤㲥㲦㲧㲨㲩㲪㲫㲬㲭㲮㲯㲰㲱㲲㲳㲴㲵㲶㲷㲸㲹㲺㲻㲼㲽㲾㲿㳀㳁㳂㳃㳄㳅㳆㳇㳈㳉㳊㳋㳌㳍㳎㳏㳐㳑㳒㳓㳔㳕㳖㳗㳘㳙㳚㳛㳜㳝㳞㳟㳠㳡㳢㳣㳤㳥㳦㳧㳨㳩㳪㳫㳬㳭㳮㳯㳰㳱㳲㳳㳴㳵㳶㳷㳸㳹㳺㳻㳼㳽㳾㳿㴀㴁㴂㴃㴄㴅㴆㴇㴈㴉㴊㴋㴌㴍㴎㴏㴐㴑㴒㴓㴔㴕㴖㴗㴘㴙㴚㴛㴜㴝㴞㴟㴠㴡㴢㴣㴤㴥㴦㴧㴨㴩㴪㴫㴬㴭㴮㴯㴰㴱㴲㴳㴴㴵㴶㴷㴸㴹㴺㴻㴼㴽㴾㴿㵀㵁㵂㵃㵄㵅㵆㵇㵈㵉㵊㵋㵌㵍㵎㵏㵐㵑㵒㵓㵔㵕㵖㵗㵘㵙㵚㵛㵜㵝㵞㵟㵠㵡㵢㵣㵤㵥㵦㵧㵨㵩㵪㵫㵬㵭㵮㵯㵰㵱㵲㵳㵴㵵㵶㵷㵸㵹㵺㵻㵼㵽㵾㵿㶀㶁㶂㶃㶄㶅㶆㶇㶈㶉㶊㶋㶌㶍㶎㶏㶐㶑㶒㶓㶔㶕㶖㶗㶘㶙㶚㶛㶜㶝㶞㶟㶠㶡㶢㶣㶤㶥㶦㶧㶨㶩㶪㶫㶬㶭㶮㶯㶰㶱㶲㶳㶴㶵㶶㶷㶸㶹㶺㶻㶼㶽㶾㶿㷀㷁㷂㷃㷄㷅㷆㷇㷈㷉㷊㷋㷌㷍㷎㷏㷐㷑㷒㷓㷔㷕㷖㷗㷘㷙㷚㷛㷜㷝㷞㷟㷠㷡㷢㷣㷤㷥㷦㷧㷨㷩㷪㷫㷬㷭㷮㷯㷰㷱㷲㷳㷴㷵㷶㷷㷸㷹㷺㷻㷼㷽㷾㷿㸀㸁㸂㸃㸄㸅㸆㸇㸈㸉㸊㸋㸌㸍㸎㸏㸐㸑㸒㸓㸔㸕㸖㸗㸘㸙㸚㸛㸜㸝㸞㸟㸠㸡㸢㸣㸤㸥㸦㸧㸨㸩㸪㸫㸬㸭㸮㸯㸰㸱㸲㸳㸴㸵㸶㸷㸸㸹㸺㸻㸼㸽㸾㸿㹀㹁㹂㹃㹄㹅㹆㹇㹈㹉㹊㹋㹌㹍㹎㹏㹐㹑㹒㹓㹔㹕㹖㹗㹘㹙㹚㹛㹜㹝㹞㹟㹠㹡㹢㹣㹤㹥㹦㹧㹨㹩㹪㹫㹬㹭㹮㹯㹰㹱㹲㹳㹴㹵㹶㹷㹸㹹㹺㹻㹼㹽㹾㹿㺀㺁㺂㺃㺄㺅㺆㺇㺈㺉㺊㺋㺌㺍㺎㺏㺐㺑㺒㺓㺔㺕㺖㺗㺘㺙㺚㺛㺜㺝㺞㺟㺠㺡㺢㺣㺤㺥㺦㺧㺨㺩㺪㺫㺬㺭㺮㺯㺰㺱㺲㺳㺴㺵㺶㺷㺸㺹㺺㺻㺼㺽㺾㺿㻀㻁㻂㻃㻄㻅㻆㻇㻈㻉㻊㻋㻌㻍㻎㻏㻐㻑㻒㻓㻔㻕㻖㻗㻘㻙㻚㻛㻜㻝㻞㻟㻠㻡㻢㻣㻤㻥㻦㻧㻨㻩㻪㻫㻬㻭㻮㻯㻰㻱㻲㻳㻴㻵㻶㻷㻸㻹㻺㻻㻼㻽㻾㻿㼀㼁㼂㼃㼄㼅㼆㼇㼈㼉㼊㼋㼌㼍㼎㼏㼐㼑㼒㼓㼔㼕㼖㼗㼘㼙㼚㼛㼜㼝㼞㼟㼠㼡㼢㼣㼤㼥㼦㼧㼨㼩㼪㼫㼬㼭㼮㼯㼰㼱㼲㼳㼴㼵㼶㼷㼸㼹㼺㼻㼼㼽㼾㼿㽀㽁㽂㽃㽄㽅㽆㽇㽈㽉㽊㽋㽌㽍㽎㽏㽐㽑㽒㽓㽔㽕㽖㽗㽘㽙㽚㽛㽜㽝㽞㽟㽠㽡㽢㽣㽤㽥㽦㽧㽨㽩㽪㽫㽬㽭㽮㽯㽰㽱㽲㽳㽴㽵㽶㽷㽸㽹㽺㽻㽼㽽㽾㽿㿀㿁㿂㿃㿄㿅㿆㿇㿈㿉㿊㿋㿌㿍㿎㿏㿐㿑㿒㿓㿔㿕㿖㿗㿘㿙㿚㿛㿜㿝㿞㿟㿠㿡㿢㿣㿤㿥㿦㿧㿨㿩㿪㿫㿬㿭㿮㿯㿰㿱㿲㿳㿴㿵㿶㿷㿸㿹㿺㿻㿼㿽㿾㿿

でも、マンガ家に限らず詩人でも小説家でもそうだけど、マンガ家になりたいと思つたらマンガがばっかり見てたんじゃだめなんです。他のこともなくちゃいけない。サッカーでもお料理でもなんでもいい。それが自分の武器になるんだよね。

例えばエッシャーは建築家だから絵の中に建築の知識が入る、手塚治虫はもとと医者だから医者の知識が入る。そういうものが武器になるんです。ですから、本筋以外にやっぱり何かなくちゃいけない。多くの場合はマンガ家だけでも詩とか童話が好きだったの、そちらの知識がある程度あるわけ。それが自分の味になっていく。

昭和の歌謡で有名な歌手の三波春夫は、もともと浪曲語りだったんですね。日本で一番上手な浪花節語りになりたいと中村吉右衛門のところへ行つて、日本一の浪花節語りになりたいと言つと、あなたはいつも何をやってますか、と聞かれたんだそうです。朝から晩まで浪花節をやつてると答えると「それでは、ダメですね。もしあなたが本当に浪花節をやりたいというのなら、浪花節以外の音楽とか歴史とかをやりなさい」と。それで三波春夫は歴史の勉強を始めたんです。だから彼は歴史にやたら詳しい。音楽をやっているうちに歌手になったんだけど、浪花節の下地があるから浪花節的な歌なんだよね。そこに歴史に対する知識、音楽的素養が入って成功したという事なんですよ。

歌手になるつもりじゃなかったのにそっちの方へ行っちゃった。でもそれはそれでいいんです。その時に浪花節が一つの武器になった。

何か一つ武器を持たなくちゃいけないと思います。それも自分の好きなことで。マンガ家を見ても、水島新司^{みづしましんじ}は野球好きです。本人はあまり野球上手ではないけれど、野球マンガの大作『あぶさん』が生まれた。

朝から晩までマンガばかり読んでいると、ろくな人間にはならないです。いいマンガ家にもなれません。マンガばかりじゃなくて、何かの付加価値がなくちゃいけない。

一番良いのは学校の勉強を一生懸命して、学校の成績が良いのがいい。そしてさらにマンガ家になるのがいいです。なぜ学校の成績が良い方がいいかというと、学校の勉強は結構基礎^{きそ}的なことを教えるようになってるんです。だからそれをやればいいんだけど、人間は全部はできないんだよね。だから好きなものを選ぶんです。スポーツでもなんでもいい。それを選んで、それでやっていく。それが自分の武器になります。とにかく何かをやりたいと思ったら、他の教養もつけないとダメ。ひとつだとそこから出られません。

A もいるけれど、続けていくためには他のものが必要です。マンガ家になりたいと思ったら、純粋美術^{じゅんすいびじゅつ}の方もよく見なくちゃならないというグアイです。努力は確かに辛いところもあるけれど、辛いというのは意外と面白いところもある。結局は本人が好きだったら、それに耐えていけます。もちろん、その途中は生やさしくはありません。趣味でやるならいいけれど、プロになるなら人の何倍かやらなくちゃいけない。

一つは運、一つは才能、一つは努力。だから一つの運に恵まれないとやっぱりダメなんです。運をつかむためには本人が努力してなくちゃいけないということです。

(やなせたかし『わたしが正義について語るなら』)

注 宮城まり子……歌手・女優・福祉事業家。下積み時代の筆者と親交があった。

浪曲……浪花節。三味線を伴奏に用いて話を語り歌う、演芸の一つ。

中村吉右衛門……初代中村吉右衛門。歌舞伎役者。

(1) 線①「俳優」とありますが、これは「にんべん」をふくむ漢字を重ねてできたことばです。次の1と3の条件にあてはまることばを例にならって答えなさい。

(例)「にんべん」をふくむ漢字を重ねた、「物事のねうち」という意味のことば。

↓「価」と「値」で、答えは「価値」。

1 「りつとう」をふくむ漢字を重ねた、「物事をはっきり見分ける」という意味のことば。

2 「しめすへん」をふくむ漢字を重ねた、「人のしあわせを願ひ喜ぶ」という意味のことば。

3 「のぶん(ぼくによう)」をふくむ漢字を重ねた、「牛・羊などを野山で飼う」という意味のことば。

(2) 線②「花が咲く」とありますが、「花」を用いた慣用句・ことわざはいろいろあります。

I 次のア～オの中で□に「花」が入らないことわざはどれですか。一つ選んで、記号で答えなさい。また、選んだものについて□には何が入りますか。漢字一字で答えなさい。

A □に嵐^{あらし}

イ 言わぬが□

ウ 枯^かれ木も□のにぎわい

E □よりだんご

オ 番茶も出□

II 「花」のように植物に関係したことばを用いた慣用句も多くあります。例にならって、次の1と3の意味の慣用句を考えて、そこで使われる植物に関係したことばを、それぞれ漢字で、指定された数だけ答えなさい。

(例) 外見、内容ともに備わっている (二つ)

↓「花も実もある」が考えられるから、答えは「花」と「実」。

1 少しも確かな証拠がない (二つ)

2 (人の性格が) さっぱりしている (二つ)

3 背後にある事実や原因を明らかにする (二つ)

- (3) —線③「あちこちやっている」と⑨「あれやこれややっている」とはどちらがいますか。それを説明した次の文の a b にあてはまることばを、それぞれ字数に合わせて、自分で考えて答えなさい。

③は、「一筋の道を a (六字)」、いろいろやる」ことだが、⑨は、「一筋の道を b (六字)」、いろいろやる」ことである。

- (4) —線⑥「例えば」とありますが、どのようなことの事例を述べようとしているのですか。次のア～オの中から最もふさわしいものを選んで、記号で答えなさい。
- ア 器用さよりも、下手くそな人の努力の方が勝るといこと。
イ 自分のメソッドを作らないと、続けていけないといこと。
ウ 一筋にやっていると、自分のメソッドができるといこと。
エ 基本を教わることには、何の意味も存在しないといこと。
オ ふとしたきっかけで、自分のメソッドは見つかるといこと。

- (5) —線⑧「画風」とありますが、ここでの「風」の使い方について、

I ⑧と同一ような使い方になっていないものを、次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 校風 イ 当世風 ウ 京風 エ 順風 オ 家風

II ⑧の「風」と同じような使い方ができない漢字を、次のア～カの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 流 イ 式 ウ 型 エ 用 オ 体 カ 様

- (6) —線⑩「それはそれぞれですが」とありますが、これはどういうことを言おうとしているのですか。次のア～オの中から最もふさわしいものを選んで、記号で答えなさい。

ア どんな友達や先生に出会うかによって結果はさまざまだが、そこから自分の独自性は生まれてくるといこと。

イ 誰にも真似のできない自分のメソッドをものにするのに、そのきかけは芸術の分野によって異なるといこと。

ウ 継続する中で独自性は身につけていくが、何が身につくかは与えられたきっかけにも左右されるといこと。

エ ひとそれぞれの仕方でものごとを続ける中で、自分だけの方法の確かさがわきまえられていくといこと。

オ 続けていくことがやがて自分の目を開いてくれるが、続けていくかどうかはその人しだいといこと。

- (7) —線⑪「自分の武器になる」とありますが、これはどういうことを言おうとしているのですか。それを説明した次の文の a b c d にあてはまることばを、それぞれ字数に合わせて、文章中からぬき出して答えなさい。

a (二字) 以外の b (八字) が、c (四字) となつて、d (四字) における d (四字) や真似のできないメソッドにつながる。

- (8) A にあてはまる五字のことばを文章中からぬき出して答えなさい。

- (9) —線⑫「運をつかむためには本人が努力しなくちゃいけない」とありますが、

I 同じことが、筆者自身の経験として最もわかりやすく述べられている段落の、初めの三字を答えなさい。(。は字数に数えます)

II 「運をつかむ」とはどういうことですか。六十字以内で説明しなさい。(。は字数に数えます)

- (10) —線④⑤⑦のカタカナを漢字に改めなさい。

2 次の文章を読んで、あとの(1)～(9)の問いに答えなさい。

「僕」は小学校のとき駅伝大会に無理やり出場させられ、自分のせいで負けたらひどい目にあわされると思ってがんばり、区間賞をとった過去をもつ。中学に入学後、その過去を知る同じ小学校出身の榊井に誘われ、陸上部に入部した。ブロック大会本番まで二週間を切った日曜日、最後の試走が行われた。

「おお、いいじゃないか、設楽。九分四十八秒だ」

下山先生はゴールを切った僕に、ストップウォッチの画面を見せた。タイムを確かめると同時に、汗が吹き出した。三年生になって初めての九分台に、ただただほっとした。

それぞれ区間を走り終えて競技場まで戻ると、みんなゆったりと休憩をした。この地域に一つしかないこの競技場は、敷地内に公園もサブグラウンドもある大きなもので、至る所に芝生が植えられている。スポーツをするのにも休息を取るのにも、最適な場所だ。僕は芝の上で、一人でストレッチをした。久しぶりに出た九分台に、心も穏やかだった。

②「おい、お前、そろそろ本気出せよ」

足の筋を伸ばしていると、大田が隣にどかと座ってきた。

「え？」

大田がやってきたことにびっくりして、僕の声はうわずった。

「え？　って、もうあと十日だろ？　マジでやれよ」

「マジでって……？」

「マジで走れってこと。お前、もっともっと速かったじゃん」

そう言うと、大田は僕のスポーツ飲料を勝手に開けて飲んだ。

「もつとって言われても……」

今日はいい記録を出せたし、自分自身のベストに近い走りだった。

「お前こんなもんじゃねえだろ。俺、陸上わからないからタイムのことは知らねえけど、小学校二年からお前は俺の何倍も速かったはずだ」

「さ、さあ……」

僕は首をかしげた。小学校二年で走った記憶などない。そもそも僕が走って記録を出したのは六年の駅伝だけで、あとは細々とした小学生生活を送っていた。

「さあとかとぼけんなよ。あのころ市野小で、俺といい勝負するのお前だけだったじゃん」

大田は話の通じない僕にいらっていたが、僕も□ん□ん□ん□んだった。大田となんて勝負したことがない。小学生の時から僕は□ん□ん□ん□んだった。大田

「あーもう、本当、お前、記憶力ゼロだな。二年生の時の全校レクリエーションで鬼ごっこしたことあっただろ？」

④「あ、そんな僕に、大田は座りなおし胡座をかけた。」

「まあ、なんか、そういうのはあったような気がする」

「そうそれ。その時俺、鬼だったんだ。俺は超最強の鬼で全員捕まえたのに、お前だけ捕まえられなかった。お前には（A）追いつけなかったもんな」

僕たちの通っていた小学校は小さかったから、よく全校や学年で遊ぶレクリエーションというのがあった。（B）僕にとってそれは楽しいものではなかった。ドッジボールをしようとかくれんぼをしようと、僕には敵がたくさんいて、いつだって必死で逃げるしかなかった。

「俺が全速ダッシュで追いかけてるのに、お前どんどん引き離してさ。手が届かなかったんだよなあ。うん、お前の走りっぷりってすごかった」

大田は昔を懐かしむように言った。

「そ、それは本気で大田君が怖かったからだよ」

⑤僕はケントウ違いに褒められるのが申し訳なくて、正直に告白した。その時の記憶はないけど、小学二年の僕にとって、追いかけてくる大田は本物の鬼以上に怖かったはずだ。

「怖い？」

「ああ、えっと、まあ、その、なんか怖いかな」

「怖いって、俺、お前に何もしたことねえじゃん」

大田は堂々と言いはなった。確かに僕は□ん□ん□ん□んだった。大田に何もされたことがない。だけど、それは相手にするのが恥ずかしいほど僕が弱いからだ。

⑥「そうだけど……でも、それは……」

「でも、何だよ」

⑦「何って……」

「はつきり言えよな」

大田の視線が僕のほうへ動く。大田の目はいつも尖^{とが}っている。その鋭^{すど}さに、僕は声が出なくなってしまう。

⑧「本当、お前って俺と（C）話そうとしねえな」

「そ、そんな……」

「まあ、お前にとっちゃ俺なんか相手になんねえだろうし、（D）俺はお前と勝負するような場にすらいねえのかもしれないけど」

⑨「いや……」

「でも、俺は小学二年の時からお前のことすげえライバルが現れたと思ってたんだぜ。俺、幼稚園^{ようちえん}から、鬼ごっこでもドッジでも負け知らずだったのに、追いつけないやつがいるなんてさ」

大田はそう言うと、また僕のスポーツ飲料を飲んだ。

大田の言っていることがわかるのには、ずいぶん時間がかかった。大田がそんなことを思っていたなんて、想像できるわけがなかった。今横にいる大田に、返したい言葉はいくつかあった。でも、僕の中のどの思いも言葉には変換^{へんかん}できなかった。

「とにかく俺ごときに簡単に追いつかれそうなどこにいるなよな」

大田はそう言うと、よいしょと立ち上がった。榊井が集合だと言っている。

「うぜえ、早く帰らせろよ」

大田は怒鳴^{どな}りながら、みんなのほうへ向かっていった。

⑩1区は最初からハイペースで、競技場を出たあたりで、早くも何人かが集団を抜^ぬけ出した。こんなに早く勝負をかけてくるなんて。一瞬^{いつしん}焦^{あせ}ったが、臆^{おく}している暇^{ひま}はない。少しでもひるんだら、そこで負けてしまう。六位以内に絶対に入らなくてはいけないのだ。

競技場を出ると川沿いの道が続く。川のすぐそばにそびえる山の本々が、音を澄^すましてくれる。静かに流れる川の音は、心地いい。大丈夫^{だいじょうぶ}だ。僕は穏やかに響^{ひび}く川音に合わせるように足を進ませた。

優勝候補^{ゆうしょうこうぼ}の加瀬^か南^{みなみ}中学の選手が飛ばし、それに何人かがついていく。僕はトップを走る加瀬南中の背中だけを見た。あの背中に追いつこう。昔、大田が僕を追いかけたみたいにとこまでも追いかけよう。単調な道に気持ちを途切^{とぎ}れさせないように、僕は先頭を追いかけた。

川沿いの道を抜け広い道に出ると、沿道にはたくさん^⑪のキャンカがいた。「ファイト」「がんばれ」という声^⑫がひっきりなしに聞こえてくる。市野中学の生徒や保護者もいて、僕に対する声援^{せいえん}もあった。初めて駅伝を走った時、僕は心底^{おどろ}驚いた。この僕が、みんなから励^{はげ}ましやねざらいの言葉を送られているのだ。もし僕が駅伝を走っていないかったら、陸上部に入っていないかったら、誰^{だれ}かに応援されることなどなかったはずだ。がんばれという言葉が、僕にはよく響く。ありきたりの言葉がありがたいうことを、僕はここにいる誰よりも知っている。榊井が僕をここに連れてきてくれた。いじめられっ子だった僕を、こんな場に導いてくれた。絶対に遅^{おそ}れるな。絶対に先頭から離れるな。僕はみんなの声をかみしめるように、さらに力をこめた。

2キロ地点を通過し、全体のスピードが上がった。先頭集団は四人。それを追う集団は僕を含^くめ五人。やはり1区の選手は最後まで力が落ちない。僕以外は二年のころから1区や6区を走っていた選手ばかりだ。誰も^⑬が華々^{はなはな}しくて際立った力がある。いや、引け目を感じることなんてない。僕は自分の腕^{うで}に目をやった。小さいころから僕は、みんなより頭一つ大きかった。そのせいで、棒^{ぼう}だの電柱^{でんちゅう}だのとからかわれた。でも、陸上部に入って、この身体は僕の強みだと知った。棒のように長く大きな身体は、僕を前へと進ませてくれる。

残り500メートル。みんながスパートをかけはじめ、僕もピッチを上げた。遅れるわけにはいかない。僕はずっと言われるがままに走ってきた。楽しいのなんて感じる余裕^{よゆう}もなく、義務のように走ってきた。だけ^⑭ど、今、僕を走らせているのは、義務感だけじゃない。「勝ちたくない？」駅伝練習が始まる前、榊井は僕に訊^きいた。勝つ、負けるということは、よくわからない。でも、この襷^{たすき}を大田に繋^{つな}ぎたいと、誰よりも早く大田に渡^{わた}したいと思っている。後ろに迫^{せま}ってくる足音を振り切るように、僕は更に加速した。

「設楽、ここまで！」

最後の角を曲がると、大田の野太い声が聞こえてきた。大田はずいぶん先から僕の

走りを真^まつ直^すぐに見ている。まぶしいのだろうか、大田の目は細くしかめられている。すごみのある大田の視線と声に、プレッシャーは極度に達した。小学校駅伝の時とは比べ物にならない重いプレッシャーだ。けれど、あの時みたいにつらくはない。この重さが心地いい。僕は残っていた力の全てをこめて、足を前へと進ませた。もう何も身体に残さなくていいのだ。全てを前に進ませる力に変えればいいのだ。僕は死に物ぐるいで走った。大田が怖いからじゃない。大田のライバルでいたいからだ。大田と同じ場に立てるやつでいたいからだ。

(4) —線②「おい、お前、そろそろ本気出せよ」とありますが、大田がこのように言つたのはなぜですか。六十字以内で答えなさい。(。は字数に数えます)

(8) —線⑫「ひっきりなし」⑬「引け目を感じる」のここでの意味としてふさわしいものを、それぞれ次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 邪魔にならないさま
イ 絶え間なく続くさま
ウ 何度もとぎれるさま
エ 単調で変化がないさま
オ 必死で落ちつきのないさま

- ⑬ 引け目を感じる
ア 引きぎわをわきまえること
イ 自分に自信がもてないこと
ウ 理由もなく人に遠慮すること
エ 人より劣っていると思うこと
オ 自分に非があると思ひ込むこと

(9) —線⑭「今、僕を走らせている」とありますが、僕を走らせているのはどのような思いですか。五十文字以内で答えなさい。(。は字数に数えます)

—13—

3 次の文章を読んで、あとの(1)～(9)の問いに答えなさい。

自分を確かにするのになくはならないものは一つだけ。言葉です。自分を確かめるちからをくれるのが言葉です。

肝心なのはそういう言葉にちゃんと出会えるかどうかであり、問題はそういう言葉と出会えるような言葉との付きあい方を、自分にうまく育ててゆけるかどうかですが、ただ言葉は情報とは違います。

情報をたくさんもっていることが物知りと考えられ、情報をたくさん知っていることが世の中を知っていることであって、情報に通じていなければ遅れているとされるというのは、知っているか知らないか、情報の量を他人と競いあうことであり、情報のゆきつくところは、すなわち他人との競争です。

しかし、^①情報がわたしたちを圧倒的にとりまいて今のようなとき、弱まっているのはむしろ情報でない言葉です。情報でないもの、非情情的なものというのが、しかし本当は、^B言葉にとつていけば大事なもののなのです。

話している人がいる。後でその人が何を言ったか思い出せない。けれども覚えていないのに、その人はどういう人だったかというイメージは、^④ちゃんとのこっている。つまり、そのように、わたしたちは言葉を通して、^Cすべて理解するのではないのです。話したのを聞いて、情報を得たから知るのではありません。

伝わってのこるものは、その人の表情、身ぶり、雰囲気、気分といった、不確かな、非情情的な言葉です。情報によって判断すると思っている事柄のおおくも、わたしたちは情報によってというより、本当は非情情的なものにとづいて、しばしば判断しています。考えるときも、わたしたちはおおく情報でないものに重心をおいて、^D言葉の表すものを測って考えます。

いまは亡い親しかった人を思いだすとき、その人の言ったことより、思いだされるのは、あのときのあのしぐさであるとか、その人の笑顔であるとか、ふくれっ面であるとか、あのときのあの眼差しであるとか、そういうほうがよく印象にのこっていないでしょうか。いまは亡いおばあさんやおじいさんのことを考えても、一緒に暮らしたのに、後になって、おばあさんやおじいさんのことはじつは何も知らなかったことに気づくということだつてすくなくないのです。にもかかわらず、その表情や雰囲気、印象的な一瞬の表情が、忘れられない記憶になつてのこっているということが

—14—

あります。

人の表情は言葉のかたちをもたない言葉です。言いかえれば、非情報的な言葉です。情報でなく、表情によって、その人のことを鮮やかに思いだすことがあるように、わたしたちは情報ではない言葉の意味するものを、判断のとても重要なところに活かすことで、自分自身を確かめることができなくありません。そうした非情報的なものを捨ててしまえば、わたしたちにとっての言葉のあり方は歪んでいきます。

⑤ 言葉を情報とだけとらえると、非情報的なことが見えてきません。意味はあっても文体のない言葉が増殖しています。知識としての意味をもちながら、その言葉のもつイメージが⑥いい⑥と感覚されない。言葉が文体、スタイルというすぐれて感覚的な魅力を欠くとき、言葉に欠けるのは言葉のちからです。

知識だけの言葉は、言葉だけ知っていてもその言葉を感じできない、そういう言葉です。知識としての情報をつらねた言葉、非情報的な文体を感じさせない言葉が⑧よ⑧しくて退屈なのは、「情報を得ること」と「言葉を読むこと」は、決定的に違うからです。

自分にとつてもっとも必要な言葉は、「言葉」だけを漁っても、たぶん見つけられないでしょう。見つけなければならぬのは、「必要」です。

そういうことを考えれば、言葉でいちばん肝心なことというのは、何かそのものを言い表して一つの意味をなすということではありません。「ばか」という言葉があります。「ばか」という言葉は、さまざまに違った意味を表せる言葉です。「ばかやろう」と人にむかって言うときのばか。「ばかやろう」と自分にむかって言うときのばか。「あなただけでばかね」と言うときのばか。「ばか言つてらあ」と言うときのばか。「仕事はか」と言うときのばか。ともすれば「ばか」という言葉は、見下げる言葉とされやすいのですが、実際は違います。「ばかやっちゃった」と言うときのばか、「ばかみたい」と言うときのばかのように、羞いや、照れや、親しみを表すものもある言葉です。だれもべつに意識していなくとも、わたしたちは日常の場面では、そのように、それぞれに意をつくして、ニュアンスを⑩いい⑩に活用する。そうして、言葉をつつむ非情報的な領域を明るくしながら、コミュニケーションを成り立たせようとしています。

言葉一つでどうにでもなるという言い方がありますが、どうにでもなるかどうかは

ともかく、「言葉一つ」というのはその通りです。ただ意味を表すだけでなく、ただ情報であるというだけでなく、確かに感じられるけれども、意味でもなく情報でもないものを、言葉によって伝えようという努力がなければ、言葉というものが信じられるものにはならないだろう。そう思うのです。

わたしたちは言葉のなかに生きていますが、意味のなかで生きているわけではありません。そうではなくて、むしろ、あいまいさのなかで生きていると言うほうが正しいかもしれません。何だかわからないけれども、そのあいまいさのなかに、コッソリと当たるものがある。確かな当たりをもつ何かがある。あいまいな自分の現在というものを確かなものにしてくれるのは、その何かです。

何かというのは、自分で感じるものとしてしか言い表せない、およそ非情報的な、意味をなさないのでしかなく何か、です。意味をなしていない、その漠然とした感覚のなかに、自分がここにいると感じさせるものがある。たとえば、古い寺で、古い木像をじつと見るときに覚えるような感覚。大事にしたいのは、そういう感覚の確かさなのです。

(長田弘『読書から始まる』)

(1) 線①「情報がわたしたちを圧倒的にとりまいて今」とありますが、「今」「情報」が「わたしたち」にとつて「圧倒的」であるとはどういうことですか。それを説明した次の文の②に入ることを、それぞれ文章中から字数に合わせ、てぬき出して答えなさい。

結果的に、（十二字）こと、あるいは（十二字）ことがよいことだと考えられ、（十二字）ように仕向けられていること。

(2) — 線②「情報でない言葉」とありますが、文章中の——線のことばを次のア～オのようにまとめたとき、②の「言葉」にあてはまらないものはどれですか。ア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 「しぐさ」「笑顔」「ふくれっ面」「眼差し」

イ 「表情」「雰囲気」

ウ 「かたち」

エ 「文体」

オ 「羞い」「照れ」「親しみ」

(3) — 線③「非情報的」とありますが、「非」はさまざまなことがらを打ち消し、対比的なことばを作る漢字です。次の1～3について、——線のことばどうしが対比的な関係になるように□に入る漢字を答えなさい。

1 非番 □ 番が回ってくる

2 非行 □ 行を積む

3 非力 □ 力なエンジン

(4) — 線④「イメージ」⑦「スタイル」⑩「ニュアンス」はそれぞれ「印象」「様式」「びみょうな意味合い」を表す外来語です。次の1～3について、あとの意味になるように□を補って、それぞれ外来語を完成させなさい。

1 □ □ ……じゅうでん充電

2 □ □ ……書類などの綴じ

3 □ □ □ ……広く知らせること

(5) — 線⑤「言葉を情報とだけとらえる」とありますが、文章中の……線A～Eの「言葉」の中でこのようにとらえられているものはどれですか。一つ選んで、記号で答えなさい。

(6) — 線⑥「い□□」「⑧」よ□□「しく」⑪「い□□□□□」の□を補って、それぞれことばを完成させなさい。

(7) — 線⑨「意をつくし」とありますが、「意をつくす」は「思っていることを十分に表現する」という意味のことばです。次の1～3について、あとの意味になるように□をひらがなで補って、それぞれことばを完成させなさい。

1 □ □ をつくす……………できるかぎりのやり方を行う

2 □ □ をつくす……………できるかぎりぜいたくをする

3 □ □ □ をつくす……………さまざまに言う

(8) — 線⑫「当たる」ということばから——線⑬「当たり」ということばはできました。この関係にあてはまらないものを、次のア～キの中からすべて選んで、記号で答えなさい。

ア 考える—考え イ 切る—切れ ウ まなざす—まなざし

エ すすむ—すすめ オ ことわる—ことわり カ 流す—流れ

キ ならぶ—ならび

(9) ……線「見つけなければならぬのは、『必要』です」とありますが、筆者は、わたしたちが「見つけなければならぬ」のは結局どのようなものだと考えていますか。五十文字以内で説明しなさい。(。は字数に数えます)